

城下町仙台の拡大に伴う侍町の変化

後 藤 雄 二

はじめに

近世初頭には、中世末期の城下町が基礎となり、領国全体の統合中心として規模が拡大された城下町のほかに、新たに多くの城下町が建設された。これらは、当時の人口を収容できるだけの面積をもち、政治・軍事・経済という城下町の機能目的に応じて、侍屋敷・町屋・寺社などが、城をひとつの核として配置されていた。ところが、内外の要因により、城下町が拡大するに伴い、離心性の強い寺社・足軽町などは、外縁に移転してゆく。この過程を研究した例は多い（鈴木1959）。これに対し、城下のなかで広い面積を占めている侍町については、このような研究はほとんどない。もちろん、侍町については、中心となる城のまわりに大身侍、外縁には小身の侍が居住しているという一時点での配置状態に関し、個々の城下町について矢守（1954）ら多くの指摘が行われてきた。さて、仮に、大身・小身侍の配置が、求心・離心性をもつとするなら、城下の拡大に伴い、それらの再配置が予想されるが、このような現象は、実際に起っていたのであろうか。言い換えるならば、城下の拡大は、旧城下城にどのような変化を及ぼしたのであろうか。この研究の目的は、上記の問題を明らかにすることにある。

研究対象としては、伊達藩の城下町仙台を取り上げた。その理由は、資料となる城下絵図が多いということのほかに、この種の研究を行なう上で、仙台は、以下のような利点を備えているからである。

(1) 城下町の規模が、この研究に相当であると考えられること。即ち、中小の城下町では、その規模に比べて、個々の変化の比重が大きすぎ、また、規模の大きな江戸などでは、構造が多核的で捉えにくい。

(2) 城下の拡大が、大規模に行なわれたこと。仙台は、城下が建設された慶長の初めから元禄期までに、城下の面積が約2倍に拡大され、変化が大きく現象を理解しやすい。

さて、この研究では、城下拡大の末期にあたる寛文～延宝期間の変化をとりあげることとし、また、対象となる侍町¹⁾とは、城下絵図に人名が記載されている組士以上の居住する地区に限定した。

1 城下町仙台の拡大

伊達政宗が、仙台青葉山の地を居城と定め、築城工事を開始したのは、慶長5年（1600）のことで、これと平行して、城下が計画的に建設された。寛永5年（1628）、政宗は城下南東に若林城（現在の宮城刑務所）を築き、在国の間ここに常住することになる。そのため、ここに小城下町が形成され、これが城下の南東への拡大を促した。寛永16年（1639）、忠宗によって二の丸²⁾（青葉山の麓）が造営されたことにより、若林城

表1 仙台関係略年表

天正 19年 (1591)	伊達政宗、本拠を米沢から岩出山に移す
慶長 5年 (1600)	仙台築城開始
寛永 5年 (1628)	若林城造営
16年 (1639)	仙台城二の丸造営
正保 3年 (1646)	正保2・3年絵図
承応 3年 (1654)	東照宮建立
寛文 5年 (1665)	仙台惣屋敷数定が出される
9年 (1669)	寛文8・9年絵図
11年 (1671)	寛文事件おこる
延宝 3年 (1675)	綱基（第4代藩主、のちの綱村）初入国
8年 (1680)	延宝6～8年絵図
貞享元年 (1684)	この年調査の奥州分内高 93万石余（奥州分表高 60万石）
元禄 5年 (1692)	元禄4・5年絵図

（「宮城県郷土史年表」「仙台の歴史」より作成）

表2 伊達家臣団の構成

○平士以上	2696名
地方知行	1700
切米扶持方	996
○組士	1050
徒小姓組・不断組・給主組・名懸組・鷹匠組	
・在々預給主	
○卒以下諸職人	4670
足軽・小人衆・餌刺衆・諸職人など	
計	8416

（寛文10年調）

（「宮城県史2」より作成）

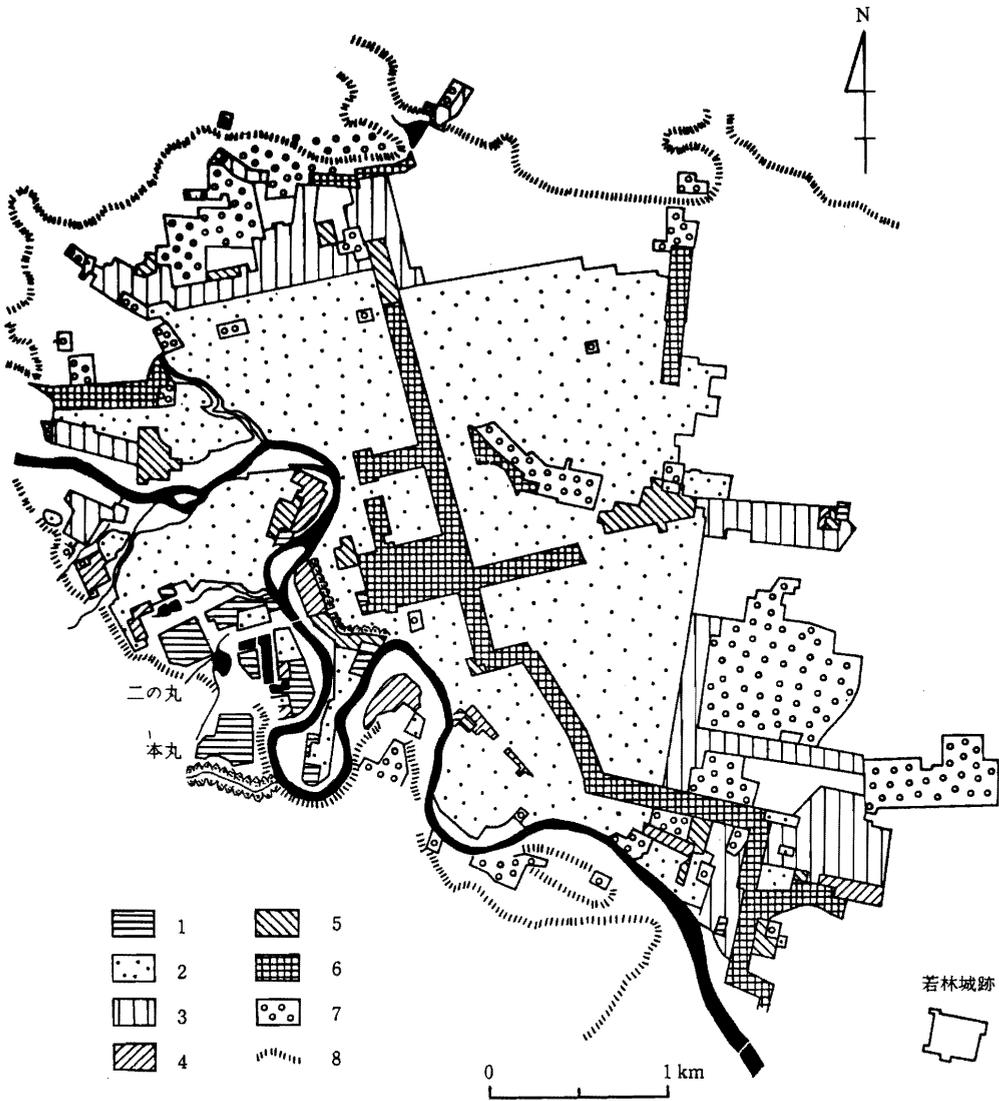


図1 寛文8・9年の仙台

1. 城・藩施設 2. 侍屋敷 3. 足軽屋敷 4. 小人・餌刺・坊主衆屋敷 5. 御職人屋敷 6. 町屋 7. 寺社 8. 丘陵との境界
 (「仙台北城下絵図の研究」付図15より作成)

は廃止され、城下は再び川内（広瀬川右岸）をその中心とすることになった。この頃、城下北東部では、北二番丁から北四番丁まで侍屋敷がつくられていた³⁾。この時期の状態を表しているのが、仙台北城下絵図として現存最古の正保の絵図（正保2・3年（1645・46）製作と推定、幕府提出用）である。これと次に述べる寛文の絵図とを比較することによって、正保～寛文期間の拡大をみると、最もそれが著しいのは城下北東部で、東照宮の建立に伴う門前町的町屋（宮町）の設置と、

北五・六番丁および宮町周辺に侍屋敷が増加しているのがみられる。

阿刀田（1936）によれば、寛文～延宝期間において作成され現存する絵図は、数種類であるとしている。筆者は、この中から、「仙台北城下絵図の研究」の付図である仙台北城下絵図（寛文8・9年（1668・69）製作と推定）と仙台北城下大絵図（延宝6～8年（1678～80）間製作と推定、以下、寛文の絵図・延宝の絵図とする⁴⁾）に基づき、土地利用分類図を作成し、この間の城下の拡大をみよ

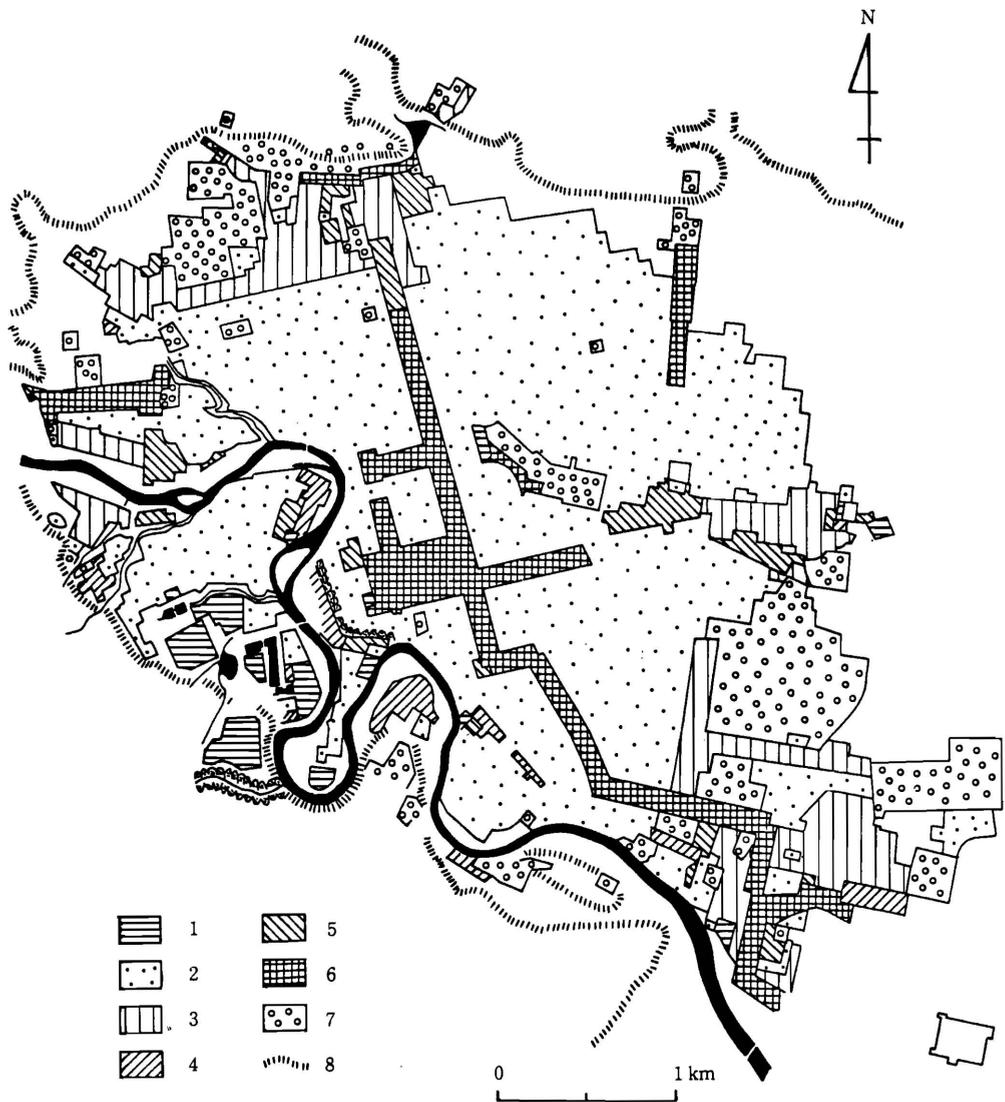


図2 延宝6~8年の仙台
凡例は図1と同じ
〔「仙台下絵図の研究」付図16より作成〕

うとした(図1・2)。城下絵図は、一枚の絵図でも城下の全体にわたって縮尺が統一されていないし、また、両絵図間でも縮尺が異なるので、地図作成にあたっては、現代の地図に道路と城下の境界をおとし、それをもとにして区分を行ない、縮尺が城下で一定となるようにした。また、原図にはないが、参考とするため、若林城跡(当時在郷分)を書き加えた。図1と図2とを比較してみると、この期間には、足軽町・職人町なども新設されているが、侍屋敷の増加が大きな部分を占めている。これについての実証的研究は、ほとんど

で行われていないが、以下の変化が生じていたとすれば、城下の拡大、とくに侍屋敷が増加したことも首肯できよう。

(1) 武家の人口は不変であっても、直臣の数が増加した。それは、新田開発等によって農業生産力の拡大がはかられたことに起因すると思われる。仙台藩では、17世紀前半においては、家臣による開発が主であったが、寛文期以降、藩直営の新田開発も大いに進み(宮城県 1966, pp. 487~494), それにより、新規召抱や加増による分家が行なわれたと思われる。⁵⁾

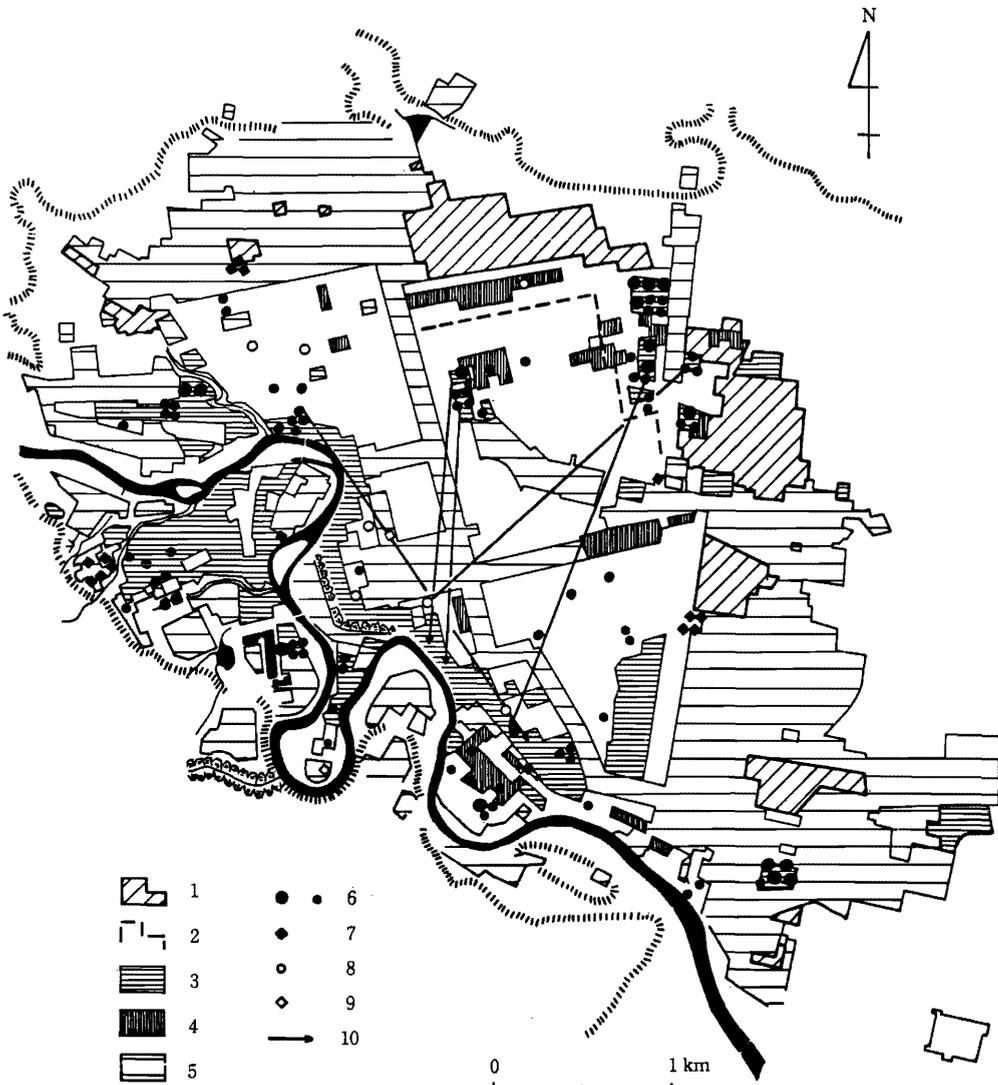


図3 侍屋敷の増減

1. 拡大地での侍屋敷の増加 2. 正保の絵図による北東部の城下の範囲 3. 寛文期における大屋敷の分布 4. 寛文期における小屋敷の分布 (3・4の大屋敷・小屋敷については、拡大地についても記入した) 5. 侍屋敷以外の土地利用 6. 分割による侍屋敷の増加 (大丸5軒, 小丸1軒) 7. 土地利用の変化による侍屋敷の増加 (1軒) 8. 合併による侍屋敷の減少 (1軒) 9. 土地利用の変化による侍屋敷の減少 (1軒) 10. 大屋敷の分割による侍の屋敷移動 (「仙台下絵図の研究」付図14, 15, 16により作成)

(2) 地方知行制がおこなわれていた仙台藩において、侍の居住形態に変化が生じてきた。つまり、地方知行の侍は、1) 仙台のみ、2) 在郷のみ、3) 仙台と在郷の両方に屋敷をもつという3種類の居住形態が可能だったと考えられるが、これらのうち、2)→3)、および2)→1)の変化がおこなわれていたと思われる(仙台市1954 pp. 347~348)。おそらくこの変化は、仙台藩の地

方知行制が変質化された⁶⁾こととも関係があるのであろう。

2 寛文～延宝期間の侍屋敷の増加

次に、城下の拡大に伴う侍の居住パターンの変化を具体的に調べてみた。この際、ふたつの側面からの考察が必要と考えた。ひとつは、侍が居住する屋敷の変

化であり、もうひとつは、居住者の移動についてである。両者は、相互に関連しているが、以下では、それぞれについて、城下の拡大に伴う変化をみていくことにする。はじめに、屋敷数の変化をとりあげた。

この研究で対象とした組土以上の戸数は、寛文の絵図で約2,520戸、延宝の絵図では約3,280戸と、両絵図間で760戸余りも増加しているが、これは、形態的に3つのタイプに分けられる。(1)城下の拡大によるもの、(2)旧城下域の中に残されていた耕地・空地が侍屋敷となったもの、(3)旧城下域内での侍屋敷の分割によるもの⁷⁾(図3)。

(1)は主として、城下北東部の北七・八・九番丁と、東部の小田原・東八・九・十番丁でみられる。延宝の絵図によってこの地域の屋敷の大きさを調べると、ほとんどが小屋敷で、これは、組土と平土でも下級の者が居住していることを示している。そのほかに、城下北西部と南東部にも若干の増加がみられるが、これらの地域についても、屋敷は小さく、北東部・東部と同じ状態が理解できる。(2)は、寛文の絵図では、城下の中に含まれながら田畑または空地であった城下北部の3ヶ所、および、南東部の御茶畑に侍屋敷が建てられたものである。

3つのタイプそれぞれの侍屋敷の増加数は、(1)が約520戸で最も多く、(2)が約70戸、(3)が約160戸となっている。これによれば、屋敷の分割による増加の占める割合も大きいといえるであろう。

屋敷の分割は、城下北東部と城の周辺において顕著である。北東部の大屋敷⁹⁾のうち6軒は、正保～寛文期間につくられたものであるが、それらが寛文～延宝期間に細分され⁹⁾、周囲に分布していたと同じ小屋敷に変化している。この傾向は、城下の拡大が停止する元禄期まで継続し、城下北東部から大屋敷が姿を消すことが、仙台の古地誌¹⁰⁾からうかがわれる。政庁である二の丸を含む川内地区でも、屋敷の分割が起きている。これには、大身侍をより多く住まわせるためと、城中の仕事に従事する小身侍の屋敷が不足していたという両方の理由が考えられよう。

城下では、侍屋敷から他の土地利用に変化したことと、屋敷が合併されて広くなるという両方の理由で、屋敷数が減少する例もみられる。後者は、城に近いところでおこっている現象で、それらは、役職が高くなり加増された侍と、綱基の初入国により仙台に屋敷を与えられた学者などの屋敷である。

寛文の絵図には、城下外縁に、下屋敷と記入されているものと、大身侍の名が2ヶ所にあることから下屋敷と判断されるものが、計4軒記されているが、そ

のほかは本屋敷とみなせる。これは、城下防禦の面からも説明できようが、新たに仙台に居住する大身侍、または、分家した大身侍が大屋敷を必要とする場合、城近くの大屋敷を分割するか、城下の外縁に大屋敷を設置するかという対応から生じたものと考えた方が妥当であろう。ところが、寛文～延宝期間では、外縁の大屋敷が細分され、城の近くには大屋敷、外縁には小屋敷という傾向が明らかとなってくる。

寛文の絵図で外縁などに存在していた大身侍の本屋敷が分割されたあと、新たな屋敷をどこに与えられたかを、図3に示した。彼らは、広瀬川左岸の中位段丘末端に連なる片平丁の南部に移動させられているが、ここは、門閥級の侍が多く居住している地区である。このように、大屋敷の分割により、大身侍が城の近くへ移され、再配置が行なわれた。

3 寛文～延宝期間の侍の屋敷移動

城下における侍の屋敷移動の激しさについては、これまでも指摘されているが、それを城下全体についてのパターンとして見出そうとする試みは、ほとんどないと思われる。そこで、ここでは城下の拡大との関連で、移動のパターンを調べることにした。

城下内での移動を調べるため、寛文・延宝の絵図に共通に存在する同姓同名の侍約700名のうち、屋敷を移動したとみられる156名について、移動前後の位置を図に示して検討した(図4)。この方法を行なう場合、いくつかの問題点がある。すなわち、(1)同姓同名の侍というが、約10年を隔てた両図にみられる者は、同一人物でも父子関係でもない場合がありうる。(2)移動の途中で経由している位置がわからない。(1)については、寛文・延宝の絵図の各時点で、同姓同名の侍は、1%以下であることから、仙台のように大きな城下町での現象では、全体の傾向を捉える上で支障は少ないと思える。また、(2)についても、傾向をみるという目的からすれば、大きな問題ではないであろう。

以上、絵図を資料とすることによって生ずる問題を考慮した上で、侍の屋敷移動の傾向をみることにする。移動した侍の屋敷分布は、城下全体での屋敷の密集度にはほぼ等しいといえる。即ち、正保の絵図で鷹師屋敷と記されている南部の米ヶ袋と土樋の地、および歩者屋敷となっていた城下北東部の組土居住地で変化が大きく、大屋敷が連なる川内・片平丁で少なくなっている。また、侍の屋敷移動を、旧城下域から拡大地への移動のほかに、城を中心として、旧城下域内での離心的・求心的移動の数を表にまとめた(表3)。表でその他とあるのは、城を中心として回転するように移動す



図4 侍町における侍の屋敷移動
 1. 拡大地 2. 旧居住地 3. 新居住地 4. 城下外からの転入地 5. 侍屋敷以外の土地利用
 (「仙台城下絵図の研究」付図15, 16より作成)

るものと、移動距離が100 m以下のものである。移動した侍のうち、25%は城下の拡大地への移動であり、それらはすべて小身の侍である。また、拡大地へ移動した侍の移動距離は、比較的短く、前居住地も城下の外縁に位置していたことがわかる。これは、城下の拡大により、小身侍が移動させられたことに起因するものであろう。旧城下城内での移動についても、離心的移動が卓越しているが、これも城下の拡大に伴う変化と考えるのが妥当であろう。

次に、寛文の絵図になく、延宝の絵図にのみみられ

る苗字の侍により、この期間に仙台へ転入してきたとみられる侍が、どのような居住分布を示しているかを調べてみた。これらは、在郷から仙台へ移ってきた侍と、新規召抱の者であり、全体で98名になる。このうち、44名が拡大地に居住しており、小身侍がほとんどである。拡大地の面積に比べ、そこへの転入の割合は大きいといえる。また、旧城下域への転入は、屋敷の密集度にほぼ等しい。

このように、城下の拡大がほぼ停滞する延宝期までには、侍の階層別に、城を中心として再配置が行なわ

表3 侍の屋敷移動パターン

拡大地への移動	39 (25%)
離心的移動	58 (37)
求心的移動	40 (26)
その他	19 (12)
合計	156

(「仙台北城下絵図の研究」付図15・16より作成)

表4 大身侍屋敷における定住度

	寛文絵図	延宝・絵図まで	元禄絵図まで
川内	48戸	29 (60%)	12 (25%)
片平丁	40	28 (70)	17 (43)
中島丁	22	14 (64)	10 (46)
清水小路	22	21 (96)	15 (68)
琵琶首花壇	8	7 (88)	6 (75)

(「仙台北城下絵図の研究」付図15・16,「仙台市史資料篇2」地図2より作成)

れ、寛文～延宝期間に転入してきた者も、それに従って城下に屋敷が与えられている。

最後に、大身侍の居住地として、川内(広瀬川右岸)・片平丁・中島丁・清水小路・琵琶首花壇(同左岸に連続的に存在)を選び、寛文の絵図にみられる侍・およびその子孫の屋敷への定住度を表にしてみた(表4)。これから、二の丸がある川内で移動が最も大きいことがわかる。伊達世臣家譜¹¹⁾によれば、川内には、重職者および藩主側近などがおり、その中には、役をはなれるとはかの場所へ屋敷を移される者もいる。また、仙台北城下定¹²⁾によると、有役の侍が無役の侍に優先して屋敷を与えられることが書かれている。この役職に伴う移動は、小身侍についてもあてはまると思われる。これらを考えあわせると、城下の拡大が行なわれなかったときには、離心的・求心的移動の数はほぼ等しかったが、拡大がおこった時期には、侍の階層による再配置のため、離心的移動が多くなるのではなかろうか。これは、今後の課題として調べてみる必要があると考える。

4 む す び

城下の拡大に伴う侍町の変化を、仙台を例として地理学的立場から把握を試み、その結果次の事柄が明らかとなった。

(1) 城下の拡大により、旧城下域の外方へ侍屋敷が広がると共に、耕地・空地の侍屋敷への転化が行なわれた。旧城下域内では、外縁および城の周辺で分割が、

また、城の周辺では屋敷囲の拡大がみられる。

(2) 城下の拡大に伴い、大身侍は城の近くへ、小身侍は拡大地または外方へ移動し、城を中心とする再配置がみられる。また、新しく仙台へ転入してきた者も、その配置に従う傾向にある。

このように、城下の拡大がほぼ停止した延宝期には、屋敷とそこに居住する侍の双方に関して城を中心とした再配置がみられる。これを、城下内での地域別によって考えると次のようになる。つまり、城下の拡大に伴う変化の著しい地区は周辺部の小身侍と大身侍とが混在していたところで、大屋敷が小屋敷に細分され、大身侍は求心的移動を、また、小身侍は離心的移動をみせている。城の周囲でも変化が著しい。大屋敷が分割されると共に、小屋敷が合併され、城の周囲に大身侍が一層集住することになる。

仙台を例として、以上のような結論が得られたが、これは、城下町すべてに共通する現象であるかは疑わしい。資料の制約により、すべての城下町について、この種の研究を行なうことは困難をとまなうが、事例を積重ねることにより、各城下町に共通する部分と特殊な部分とを見極めることが、今後の課題であろう。

本稿の作成にあたり、御指導を賜った東北大学能登志雄前教授、西村嘉助教授、長谷川典夫助教授に深く感謝いたします。

(1977.3.19 受理)

注

- 1) 仙台では、これを「丁」「小路」「通」といい、町人町・足軽町と区別していた(小林1957)が、ここでは「侍町」と総称することにした。
- 2) 二の丸の造営により、山上の本丸は儀式のときだけ使われることになり、ここが、藩主の居館と政庁を兼ねることになる。
- 3) 「寛永十四・五年之頃、北二番丁より北へ御屋敷割御座候。」(東奥老士夜話 仙台叢書第八巻所収)
- 4) 正保・寛文・延宝の絵図の製作年代については、阿刀田(1936)の推定に従った。
- 5) 三好(1970)は、新規召抱や分家による家臣の増加が、侍屋敷地区の拡張・再編を促すことを示唆している。
- 6) 延宝期以降、藩主の集権体制の強化と、封建農民の成長とによって、大身領主層においても単なる徴税権が認められるだけとなる(宮城県1966, p.101)。
- 7) 服部(1966)は、城下中心地域における侍屋敷の細分化傾向と重臣クラスの下屋敷が分割されて

いることを、後期的変容のひとつとして指摘している。また、阿刀田(1936)も大屋敷の細分に注目している。

- 8) 寛文5年(1665)の仙台惣屋敷定(仙台市史8所収)には、侍の禄高に対する屋敷の広さが規定されている。ところが、百貫文以上については記載がない。そこで、ここでは、1200坪(百貫文より八十貫文までは、表40間裏30間の規定)以上の屋敷を大屋敷とよび、1間=6尺とみなして絵図上で広さを測定し、図3に記入した。また、十貫文以下および切米扶持方の侍は、360坪(表12間裏30間)の広さと定められていたので、これを小屋敷としてそれが連続している地域をも図3に示した。絵図の性質上、区分は厳密とはいえないが、これによって大屋敷・小屋敷の分布の概要はつかめると思う。なお、本文中で小屋敷と述べているのは、図に示したものよりやや広い屋敷も含んでいる。
- 9) 古地誌のひとつである仙台鹿の子(仙台市史8所収)には、この記事がいくつかみられる。「津田玄蕃大屋敷四方百三十四間なり。延宝六年四月わりくずし小屋敷數軒いづる。」「山本勘兵衛屋敷延宝三年小屋敷四軒となる。」「亘理信濃屋敷寛文十一年の頃丁を通し小屋敷となり六軒丁出る。」

- 10) 上記の仙台鹿の子など。
11) 藩政中期における100石以上の家臣の略歴を記したもの。
12) 仙台市史8所収。

文 献

- 阿刀田令造(1936): 仙台城下絵図の研究 斎藤報恩会博物館図書部研究報告 第4 134頁
小林清治(1957): いわゆる「城下町」の構造 福島大学学芸部論集 8-1 26~37
鈴木昌雄(1959): 初期の江戸における町の変遷と寺院の移転 地方史研究協議会編: 封建都市の諸問題—日本の町II 雄山閣 95~112
仙台市(1954): 仙台市史 1 588頁
田辺健一(1962): 市街地の拡大と人口移動との関係 東北地理 14 79~84
服部昌之(1966): 城下町徳島における都市構造の変容過程 地理科学 5 23~36
宮城県(1966): 宮城県史 2 716頁
三好昭一郎(1970): 徳島城下町の成立について 総合学術調査「徳島」郷土研究発表紀要 15 147~163
矢守一彦(1954): 城下町の人口構成—彦根藩の歴史地理的研究I 史林 37 174~188
——(1970): 都市プランの研究—変容系列と空間構成 大明堂 438頁
矢崎武夫(1962): 日本都市の発達過程 弘文堂 466頁

The Changes of *Samurai* Quarters in Expansion Process of the Castle Town Sendai

Yûji Goto

In Japan, in the late 16th and the early 17th centuries, many castle towns were newly constructed as political, economic and military centers of feudal territories under city plannings. Sendai was such a case. Exemplified from the case of Sendai, the author intends to analyze the changes in *samurai* quarters which occupied extensive area in the castle town.

For the analyzing, he compared the two maps in the second half of the 17th century. The size of residential lots generally diminishes in accordance with the distance from the castle. According to the older map, however, there was mixed residential sites of different classes of *samurai* on the periphery.

The remarkable changes were at the residential areas near the castle and on the periphery. On the periphery, the sites of large houses were subdivided into small

units, and upper-class *samurai* moved to the houses of larger sites located near the castle. At the same time, the lower-class *samurai* moved further outward, accompanied with the expansion of built-up area. At the residential areas near the castle, a shortage of large houses for the upper-class *samurai* was brought about. The sites of larger houses were subdivided into the sites of medium size, and small sites were combined to larger sites.

As the result, the house of upper-class *samurai* were concentrated to the areas near the castle, and the periphery exclusively became the residential areas of lower-class. Thus, the zoning of *samurai* quarters became clear in the late 17th century when the expansion of castle town stagnated.